

Amazing Grace

アメイジング・グレイス

Music : Traditional, Arrangement by Daisuke Minamizawa

トラディショナル／編曲：南澤大介

BSVD-9901n / ver.2.0.0

Drop D Tuning (6th String=D) Capo=0

Diagram A: D chord (5 6 7) and D7 chord (5 6 7) fingerings.

Chord diagrams: D (5 6 7), D7 (5 6 7), Gmaj7 (3 4 5), and another D7 (4 5).

Diagram: D chord (5 6 7) and D7 chord (5 6 7) fingerings.

Diagram: Asus4(9) (5 6 7), Aadd9 (5 6 7), and Aadd9 (5 6 7) fingerings.

Chord diagrams: Asus4(9) (5 6 7), Aadd9 (5 6 7), and Aadd9 (5 6 7).

[illegible]

The image displays a musical score for the song "The Sound of Silence" by Simon & Garfunkel. It includes a guitar part (top staff) and a bass part (bottom staff). The guitar part is written in treble clef with a key signature of one sharp (F#). The bass part is written in bass clef. The score is divided into three measures, each with a chord diagram above it: A7, Gmaj7, and D. The guitar part features a melodic line with a grace note (g.) and a triplet. The bass part features a bass line with a grace note (g.) and a triplet. The score ends with a double bar line and the instruction "rit.".

Chord Diagrams:

- A7:** A major triad (1, 3, 5) on the 5th fret, with a 7th fret extension on the 4th string.
- Gmaj7:** A major triad (1, 3, 5) on the 3rd fret, with a 7th fret extension on the 4th string.
- D:** A major triad (1, 3, 5) on the 2nd fret, with a 7th fret extension on the 4th string.

Tablature:

The tablature is written on a six-line staff. The guitar part (top staff) uses numbers 0-7 to indicate frets. The bass part (bottom staff) uses numbers 0-7 to indicate frets. The guitar part includes a triplet of eighth notes (7, 0, 5) and a triplet of eighth notes (3, 4, 0). The bass part includes a triplet of eighth notes (3, 4, 0) and a triplet of eighth notes (3, 4, 0).

Lyrics:

The lyrics are written below the bass staff. The first measure contains the lyrics "Hello, hello, good-bye, good-bye". The second measure contains the lyrics "The sound of silence". The third measure contains the lyrics "The sound of silence".

Amazing Grace アメイジング・グレイス

18世紀末に、イギリスの牧師ジョン・ニュートンによって書かれた賛美歌です。作曲者は不詳。

開放弦を多用し、弦の響きの重なりを重視してアレンジしています（そのため、消音はほとんど使っていません）。

A

① 直前のフォームからは、軸にできるような共通の指がありませんが、一度に押弦せず弾く順番に押さえていけばよいでしょう。

② この小節は2回目（リピート時）のみ、カッコで括られた部分を弾いています。

③ このグリス・アップは、1回目（直後のリピートで **A** に戻る時）ではハイ・ポジションに移動するためグリッサンドを行い、2回目（リピート時。 **Intro** に行く直前）では次のフレーズもロー・ポジションで弾くため、行いません。

【音 源】 BSVD9901a

【録 音 日】 2013年11月15日

【使用ギター】 モーリス S-131M

楽譜【Score】

本楽譜では、メロディは音符の棒や旗を上向き、伴奏は下向きに表記して、区別しています。ただし、かえって煩雑になる場合、違う分け方をしている場合もあります。

伴奏は基本的に、次のコード・チェンジまで音を伸ばしておきます。特に押弦して弾く音の場合、“音を出したからもういいや”と、コードの途中で離すのではなく、フォーム・チェンジに支障がない程度にぎりぎりまで押さえておくといでしょう。図①の場合、本楽譜では上の譜例のように記譜してありますが、実際には下のように、同じコードの間は音を伸ばしておきます。

カッコに囲われた伴奏の休符は、記譜の都合によるもので、意図的に音を切るわけではありません。基本的には、その前に弾いた伴奏（特にベース音）などを伸ばしておきます。②の場合、直前の伴奏である3弦開放・G音は同じ弦でメロディを弾くために止まりますが、ベース音の5弦3フレット・C音は押さえたまま、伸ばしておきます。

カポを使う曲の場合、楽譜上では、実音表記（実際に鳴っている音の高さでの表記）ではなく、プレイ・キーでの表記（カポ位置を、通常のギターの0フレットの音とした表記）が一般的で、本楽譜もそのように表記しています。図の例では、実際に鳴っている音やポジションは左の譜例ですが、カポの位置を0フレットとして記譜すると右の譜例のようになります。また、これに付随して本楽譜の解説文では、カポを付けたフレットを0フレットとして音名を表記しています。たとえば図③の最初のメロディは、実際には1弦4フレット・G#音ですが、解説では楽譜に合わせて、1弦開放・E音と記しています。

また、TAB譜の数字が少しだけ横方向にずれて記されている場合があります（図④）。これは表記スペースの都合によるもので、ずらして演奏するわけではありません。ご注意下さい。

① 伴奏は基本的に、コード・チェンジまで音を伸ばします。

③ 左が実音表記、右がプレイ・キー表記。本楽譜は右です。

④ TAB譜のずれ(左)は、実際には同時に弾きます(右)。

装飾音符【Grace Note】

ハンマリングやプリング、スライドなどの開始音が小さく書かれている(装飾音符)場合、楽譜上では他の音より少し早く弾き始めるように見えますが(❶)、これは記譜上の都合によるもので、実際には他の音と同時に弾きます(イメージとしては、❷のような感じです)。

8va【Ottava Alta】

8va は、五線譜に記された音符よりも 1 オクターブ高い音を弾くという意味です。ハーモニクスなどで時々用いられます。

特定の周回のみ弾く【○x only, ○x】

リピートやセーニョなどで楽譜の同じ部分を何度か演奏する際に、周回によって演奏内容が異なる場合、音符や休符、時には小節をカッコで囲い、○x onlyまたは○xと付記しています。

○x onlyは○回目のみ演奏する(それ以外の回では演奏しない)ことを示します。○xは、○回目はカッコ内を演奏し、それ以外はカッコ外を演奏します。

ダイアグラム【Diagram, Fretboard】

左手の押さえ方や運指(フィンガリング)を図示したものです。本楽譜では五線譜の上に、おおまかな進行を含めた運指を記したダイアグラムを掲載してあります。たいていは該当する音符の真上に図示してありますが、スペースの都合でずれてしまう場合は、どの部分のダイアグラムか…を点線で示してあります。

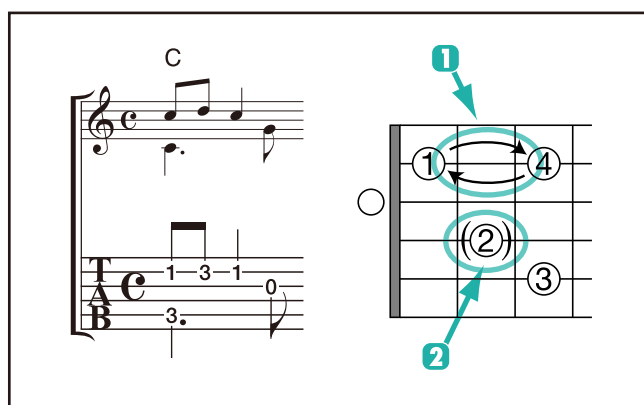
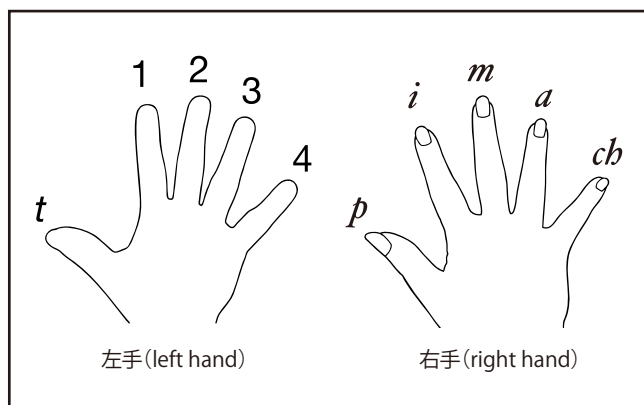
ダイアグラムでは、左端の○は開放弦、①は左手人差指、②は左手中指、③は左手薬指、④は左手小指、①は左手親指、①は右手人差指、②は右手中指で押さえることを表しています。また、下の小さな数字は、フレット番号を表しています。消音すべき音(弦)に×は付けてありませんので、ご注意ください。

一部のダイアグラムには、指の動きを示す矢印も付記しています。複数の矢印がある場合、指数字の上側のものは、下側のものより先に弾くことを表します(❶)。ただしこれらの矢印は指の動きを示したもので、図からイメージされる順序と演奏の順番は必ずしも一致していない場合がありますので、ご注意ください。また()付きで示された音は、弾かないけれど押さえておいたほうがよい音を表しています(❷)。

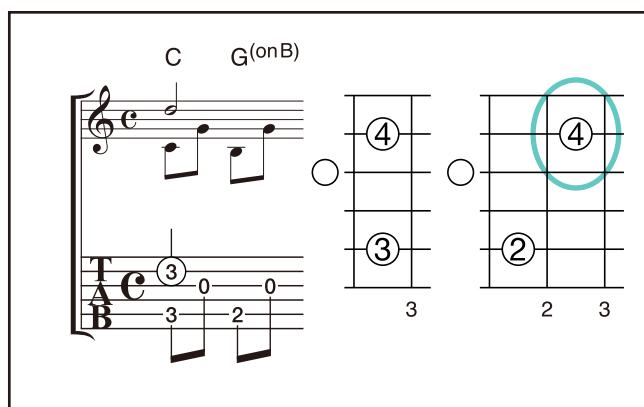
ダイアグラムが記されたタイミングでは弾かないけれど、その前に弾いていて音が伸びている場合、押弦して出す音に関しては指数字を記してあります(❸)。開放弦による同様の音に関しては特に○を付記してありませんので、ご注意ください。

また、フォーム・チェンジなどの際に、“移動の軸”にできる左手指”や”押さえたままにすると移行が楽になる左手指”がある場合は、ダイアグラムどうしの間を線で結んであります。移動の軸にできる指は薄青矢印、押さえたままの指は先端が丸の薄赤線で示しています(❹)。ダイアグラムの同じ弦に複数の指が書かれている場合、基本的に線の左側のダイアグラムでは動作の最後に押さえた指、右側のダイアグラムでは動作の最初に押さえる指が、軸になる指(または押さえたままの指)となります。そうではない場合は、線上に指数字を記してあります。

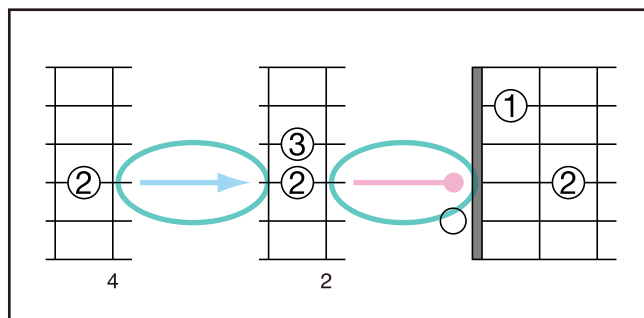
ただしこれらの指使いは、人によっては違う押さえ方が方しくり来ることもあるかもしれません。その場合は、押弦する指を変えていただいて構いません。



矢印は指の動きを表します(順序は数字上側→下側)。



❸ 押弦した音が伸びる場合、指数字を記してあります。

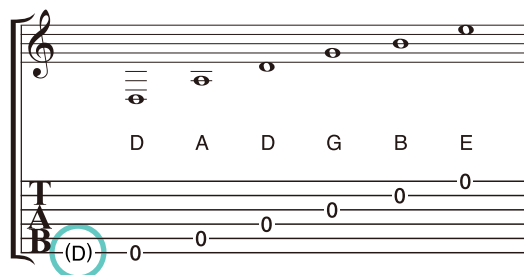


❹ 移動や移行の軸にする指は、矢印などで示しています。

チューニング【Tuning】

チューニングは、楽譜の冒頭に明記してあります。また、TAB 譜の一番最初 (1 段目の左端) には、ノーマル・チューニング (EADGBE, 6→1) から変更する弦を示しています。図の例の場合はドロップ D チューニング (6 弦のみ E 音を全音下げて D 音にします) ですので、6 弦の左端に「D」と記してあります。

Drop D Tuning (6th String=D)

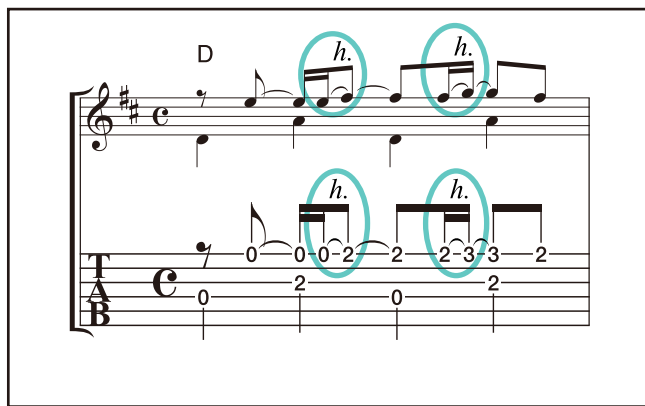


コードと単音の区別【Chord & Note】

本楽譜の解説文中では、たとえばコードとしての C は「C」、単音としての C は「C 音」と表記して、区別しています。

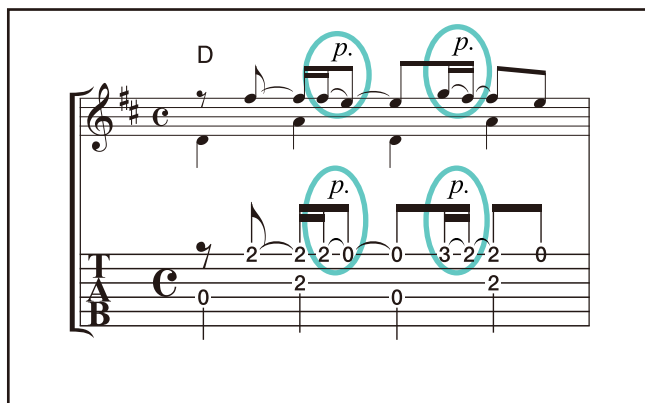
ハンマリング【h. (Hummer-On)】

右手でピッキングした後、左手で弦を押さえて、高さの違う音を出す奏法です。楽譜上の開始音のみピッキングして、到達音はピッキングせずに左手の押弦動作だけで音を出します。



プリング【p. (Pull-Off)】

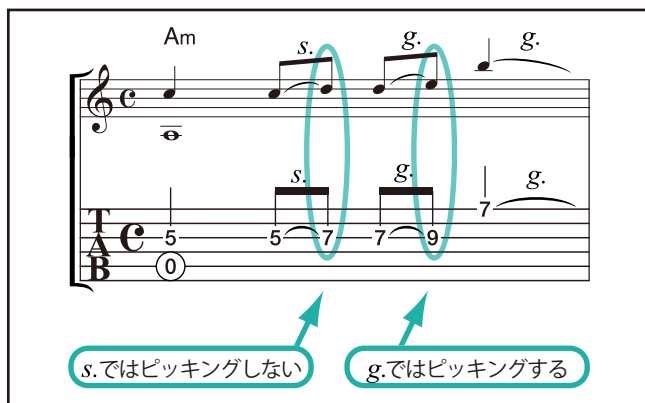
右手でピッキングした後、押弦していた左手で弦をはじくように離して、高さの違う音を出す奏法です。楽譜上の開始音のみピッキングし、到達音はピッキングせずに左手の離弦動作だけで音を出します。



スライドとグリッサンドの区別【s., g.】

スライドもグリッサンドも、左手を押弦したまま移動させて、なめらかに音を変化させる奏法です。

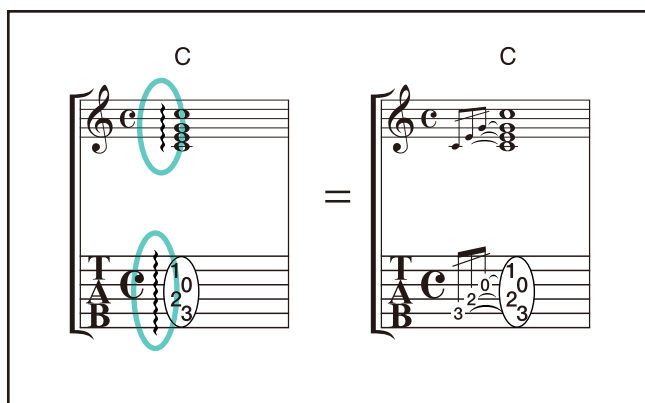
本楽譜では、開始音と到達音の両方が表記されていて開始音のみピッキングする場合を「スライド (s.)」とし、開始音と到達音の両方が表記されていて両方ともピッキングするか、片方しか表記されていない場合を「グリッサンド (g.)」として、使い分けています。



クイック・アルペジオ【Quick Arpeggio】

2本以上の弦を同時にピッキングする際に、低音弦側(弾く指で言うと右手親指側)から少しだけ時間差を付けて、弦を1本ずつ弾く奏法です。

本楽譜では、音符の左側に付記された波線で表されます。低音弦側(親指)をほんの少し早く弾き、高音弦側が拍ちようどのタイミングに来るようにするとよいでしょう(イメージとしては、図の右譜例のような感じです)。

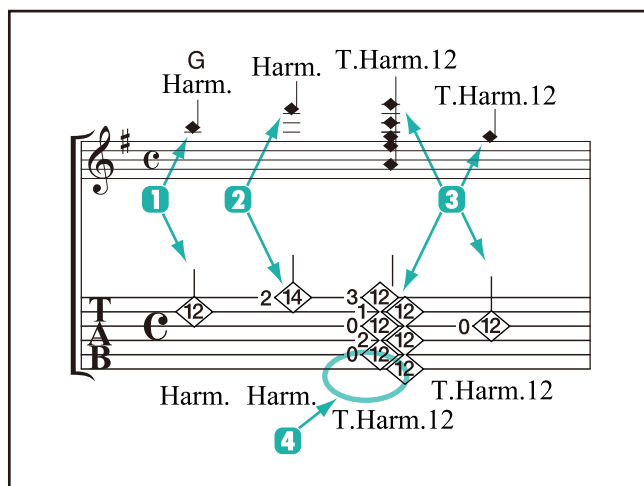


ハーモニクス【Harm. (Harmonics)】

独特の澄んだ音(倍音)による奏法です。ハーモニクス・ポイントと呼ばれる特定のポジション(弦の 1/2、1/3 などの場所)に触れながら弾くことで出します。開放弦によるハーモニクスをナチュラル・ハーモニクス(❶)、左手で押弦しながら右手でポイントに触れつつ弾くものをテクニカル・ハーモニクス(❷)、ポイントを右手で叩いて出すものをタッピング・ハーモニクス(T.Harm./❸)と呼びます。

五線譜上では菱形の音符で記され、TAB 譜では数字を菱形で囲ってあります。また“Harm.”と付記されるか、“Harm.○”のように触れるフレット番号が表記されていることもあります。テクニカル・ハーモニクスやタッピング・ハーモニクスのように、左手の押弦を伴う場合、TAB 譜では菱形で囲ったハーモニクス・ポイントの左側に、左手で押さえるフレットの番号を記してあります。

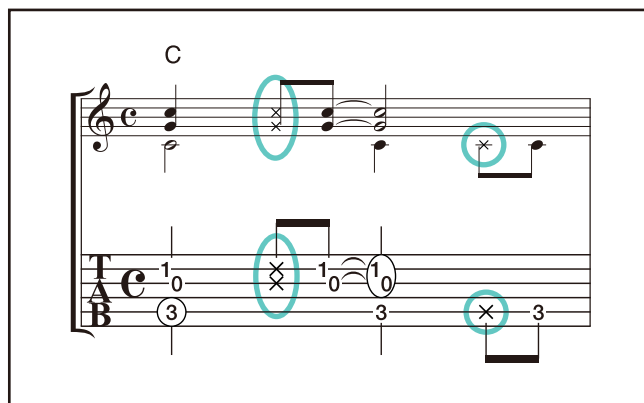
タッピング・ハーモニクスで TAB 譜の押さえるポジションが記していない弦は、左手で消音するなどして音が鳴らないようにし(❹)、右手はその弦も含めて叩きます。



ストリング・ヒット【String Hit】

右手の指で弦を叩き、そのまま弦に指を乗せることで、音を止めると同時に打音を出す奏法です。

本楽譜では、×印の符頭で表されます。たいていの場合、次のピッキングの準備を兼ねていますので、指は次にピッキングするまで、弦に軽く乗せたままにしておくといでしょう。



消音とミュートの区別

本楽譜では、音を詰ませた弾き方を「ミュート」、出たくない音を止めることを「消音」として、用語を区別しています。

ストローク【Stroke】

複数の弦を1本の指でまとめて弾く奏法です。本楽譜では、TAB譜の下に付記された ▮ (ダウン・ストローク／低音弦側から高音弦側へのストローク)、 ▽ (アップ・ストローク／高音弦側から低音弦側へのストローク) で表されます (❶)。また、楽譜上に斜めの四角 (スラッシュ) で表記されたストロークによるコードは、直前に弾いたのと同じ音を、フォームを変えないで弾くことを表しています (❷)。この時 TAB 譜のスラッシュの高さは、どの弦を弾くかを示しています。

演奏する際の右手は、弾きやすい指を使えばよいでしょう。私は、ほぼ中指か人差し指で行っており、激しいストロークの場合は複数の指を寄せ、1つのピックのようにして弾くこともあります。

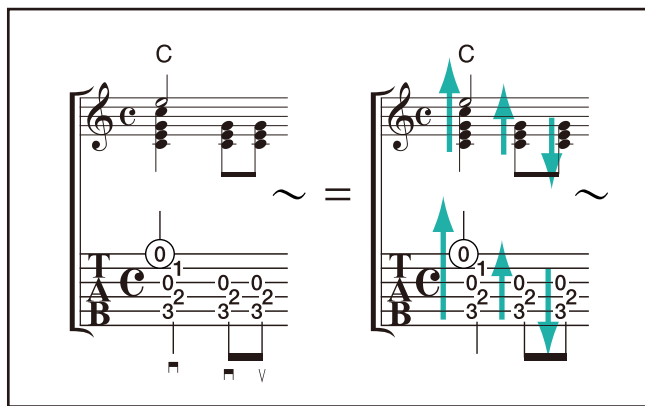
メロディと伴奏をストロークで同時に弾く場合には、メロディはピッキングして伴奏はストロークする…のではなく、1つのストロークで両方を弾き、ストロークの最高音がメロディになるようにします。伴奏楽器としてギターを使う場合と比べ、高音弦(メロディ)をしっかり弾くように意識しましょう。逆に、伴奏として記譜してあるストロークは、すべての音がキチンと出ていなくても、塊としてコードが響いていれば OK です。

メロディより高い弦は、音を出さないように消音することが大切です。また、ストローク時に途中の弦を弾かないよう記譜してある場合…たとえば右図のGでは、5弦の音は出たくないのに、他の弦を押さえた指(この例の場合は6弦5フレットを押さえた薬指)などで触れて消音します (❸)。

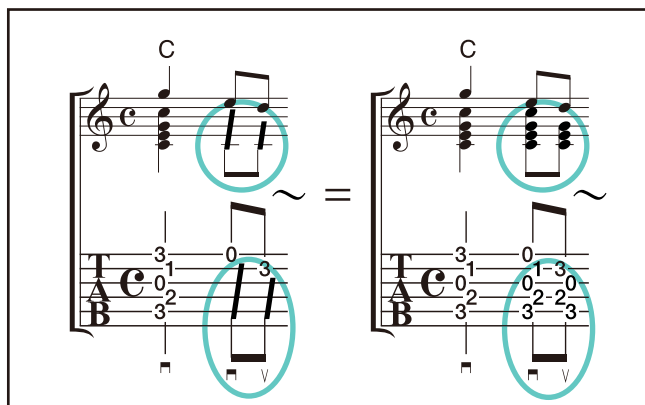
ブラッシング【Brushing】

音高感の無いストロークで、ミュート・カッティングともいい、楽譜では縦長のXで表されます。

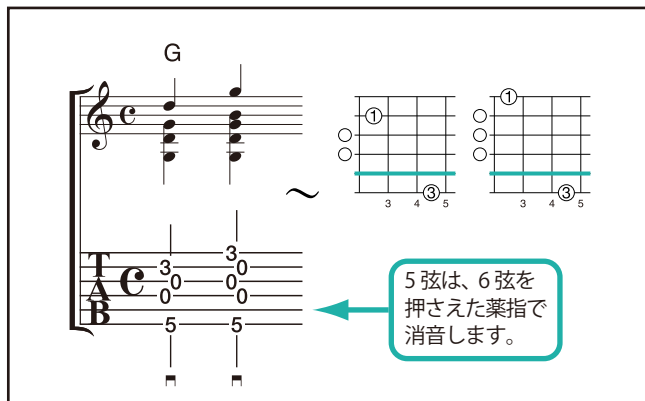
押弦した左手を緩めるか(ただし、弦から指を離さずに軽く触っておきます)、押弦に使っていない左手小指などで全弦に触れるなどして、ストロークします。



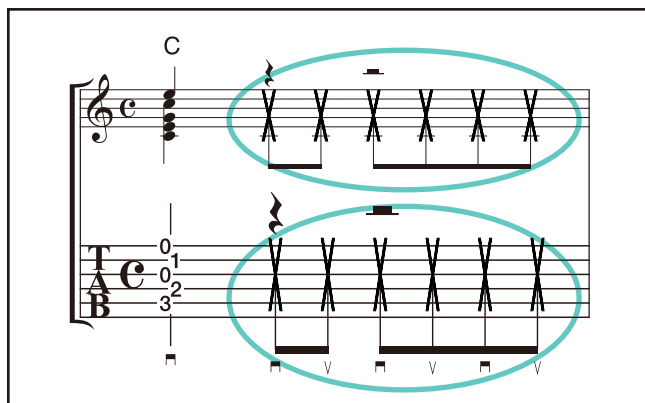
❶ ダウン・ストローク、アップ・ストローク



❷ スラッシュは、直前と同じフォームで弾きます



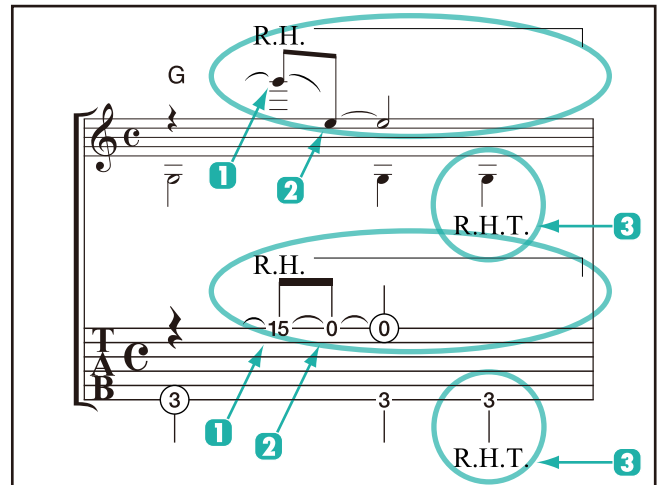
❸ 途中の弦を弾かない場合、しっかり消音します



ライト・ハンド【R.H. (Right Hand)】

右手だけで音を出す弾き方です。動作としては右手によるハンマリング(押弦／❶)、プリング(離弦／❷)などがあります。

右手親指などで弦を叩き、そのまま離して、(打音だけではなく)音高感のある音を出す弾き方を「ライト・ハンド・タッピング (R.H.T.)」と呼ぶこともあります(❸。叩いた後にそのまま指を弦に乗せているとストリング・ヒットになり、打音しか出ません)。



レフト・ハンド【L.H. (Left Hand)】

左手だけで音を出す弾き方です。右手のピッキングを伴わないだけで、動作としてはハンマリング(押弦／❶)やプリング(離弦／❷)、スライド(❸)と同じ場合も多く見られます。

